

3. 北条の里と旧下田街道にみる歴史的風致

韮山地区^{かのがわ}の狩野川右岸に位置する^{もりやま}守山周辺は、鎌倉時代から室町時代にかけての長きにわたって、政治的に重要な拠点であった。そのことは、鎌倉幕府の執権として権勢を誇った北条氏の館跡である「史跡北条氏邸跡(円成寺跡)」、北条時政が、源頼朝の奥州平泉(藤原氏)攻め戦勝祈願のため建立した寺院「史跡願成就院跡」^{がんじょうじゆいん}、室町幕府の関東支配の拠点であった「史跡伝堀越御所跡」^{でんほりごえごしよ}という三つの国指定史跡(「守山中世史



東側上空から見た守山

跡群」と総称)が集中していることからもうかがえる。四日町・寺家^{じけ}・中條は、古来「北条三か村」として捉えられてきた経緯もあり、歴史的に繋がりが深い。伊豆の国市では、四日町・寺家・中條の三区にまたがるこの一帯を「北条の里」と呼称している。

守山の東側には、東海道の三島を起点に、伊豆半島南端の下田に至る往還である「下田街道」が通っている。天城峠を越えて下田まで南下するルート(現在の国道 136 号-414 号)全体が整備されたのは、近世以降である。しかし、三島から北条の里へ至る道は、近世以前より、狩野川の水運とともに交通の動脈として重要な役割を担っていたと思われる。前述の三つの史跡をはじめ、複数の寺院が面していることから、守山近傍における中世の道筋(旧下田街道)は、現在の国道 136 号より一本西側の道であると考えられている。

この「旧下田街道」に沿って所在している寺院は、北から成福寺、光照寺、願成就院、信光寺、そして守山南麓にある眞珠院の 5 か寺である。



国宝
木造不動明王及二童子立像



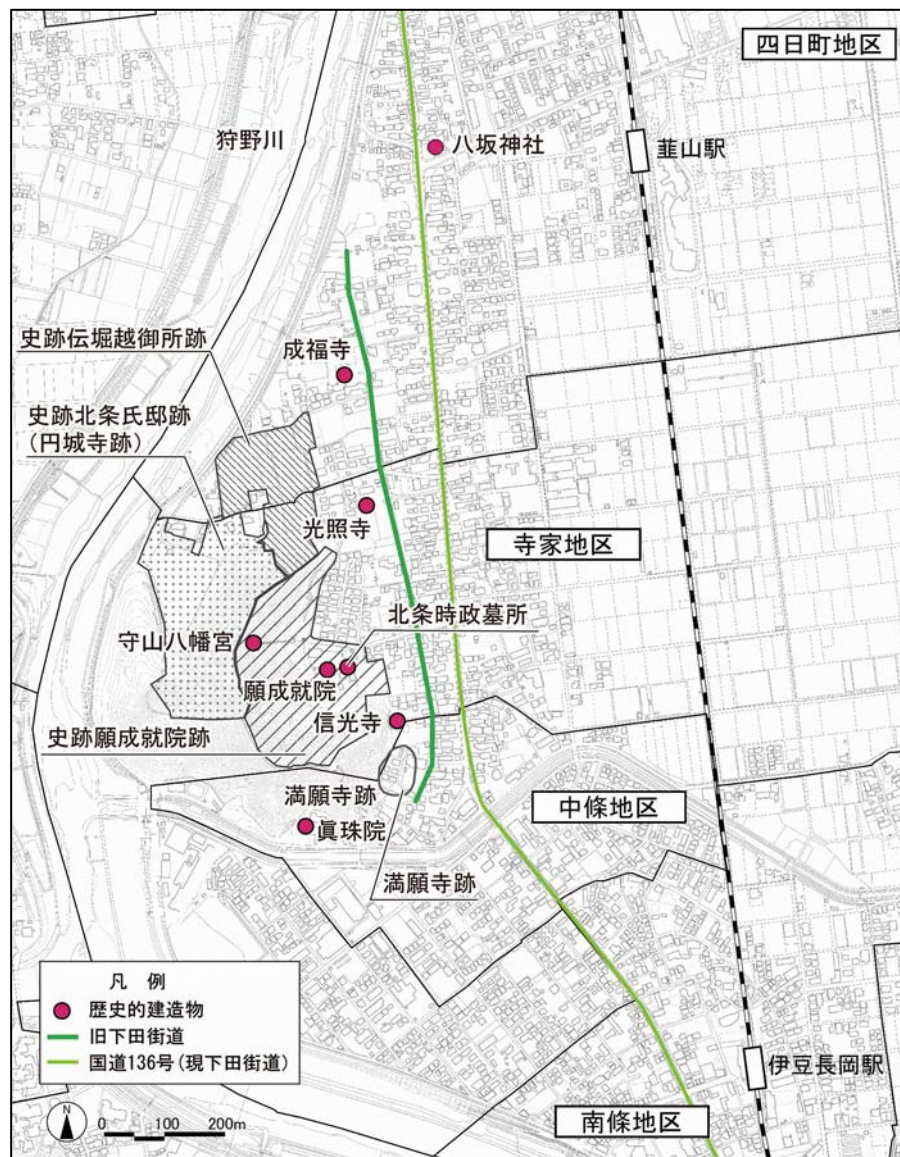
国宝
木造阿弥陀如来坐像



国宝
木造毘沙門天立像

さらに、眞珠院と信光寺の間にかつて存在した満願寺が、周知の埋蔵文化財包蔵地(満願寺跡)として登録されている。その他にも、正確な位置は不明ながら、複数の寺院がこの地区に存在したことが寛政12年(1800)に完成した伊豆の地誌『豆州志稿』に見えており、政治のみならず、信仰の面でも重要な土地であったことを物語っている。北条の里と旧下田街道の佇まい、そして、そこに伝わる伝統的な行事は、北条氏を中心とする中世の伊豆の国市の歴史を今に伝えている。

図2-3-1 歴史的建造物の位置図



(1) 北条の里と旧下田街道にみる歴史的風致を構成する建造物

①願成就院

史跡願成就院の範囲内には、現在も真言宗の寺院である願成就院がある。前述のとおり、北条時政によって文治5年(1189)に創建された寺院である。国立歴史民俗博物館所蔵の『てんぼうりんしょう 転法輪鈔』(建保4年(1216)写)に、北条時政が施主となって伊豆堂(願成就院)を建立したのが、文治5年(1189)との記述が見える。『吾妻鏡』によれば、北条時政は願成就院建立に合わせてうんけい 仏師運慶に依頼して「阿弥陀三尊」



願成就院本堂

「不動明王」「多聞天(毘沙門天)」の仏像を造立し、同寺に安置している。これら運慶作諸仏の内、木造阿弥陀如来坐像・木造不動明王及二童子立像・木造毘沙門天立像が昭和36年(1961)に建立された大御堂に現存しており、いずれも国宝に指定されている。

また、願成就院には、創建から600年を期して寛政元年(1789)に建立された寄棟造茅葺の本堂があり、県指定文化財の木造阿弥陀如来坐像(鎌倉時代前期、慶派作)が安置されている。大御堂に隣接する宝物館には、同じく県指定文化財となっている木造地藏菩薩坐像(鎌倉時代前期)が伝来している。この地藏菩薩像は、北条政子の七回忌に北条泰時が奉納したものと伝えられており、「政子地藏」とも呼ばれている。境内には、北条時政の墓所も所在する。

②守山八幡宮

北条の里の中心とも言える守山は、それ自体が古来より信仰の対象であった。その守山の中腹に、守山八幡宮が鎮座している。源頼朝や堀越公方足利政知の崇敬を受けたという伝承を持つ守山八幡宮は、寺家地区の鎮守であると同時に、北条の里の総鎮守としての側面も併せ持った神社である。



守山八幡宮

祭神はほんだ 菅田別命・おおやまづみのみこと 大山祇命・このはなさくや 木花開耶姫命ひめのみことの三柱で、他に4社の境内社がある。

代々宮司を務める榎家に伝わる『守山八幡宮記録抄』によると、山腹の巨岩から清水が湧出し、これを福石明神として祀ったことに始まり、大山祇命・いわとこたか 石徳高神社・八幡大神を順次勧請して守山八幡宮が成立したという。『吾妻鏡』には、伊豆に配流されていた源頼朝が、平家追討を命じる以仁王の令旨を受け取った時、まず「男山」を遙拝した後にそれを披見したという記述があるが、この男山を守山に比定する説がある。

また、寺家区に伝わる「守山八幡宮境内図」には、往時の栄えていた境内の様子が描

き出されている。『守山八幡宮記録抄』では、堀越公方の信仰を受けていたため、戦国時代には、堀越公方を滅ぼした後北条氏に社領を召し上げられるなど冷遇されたと伝えている。

切妻造鋼板葺平入の拝殿・幣殿・覆屋があり、覆屋の中に本殿を収める。本殿内には、後北条氏が豊臣秀吉に敗北した後、菰山城主となった内藤信成とその息子信正による、慶長2年(1597)銘の棟札が伝来している。

現在の本殿は、寛永9年(1632)に久能山東照宮祭主榊原照久が造営したものである。榊原照久は、古奈温泉を訪れた際に榎家に逗留し、その礼として本殿を造営したと伝えられる。なお、榊原照久の娘は、江川家第29代英政に嫁いでいる。



守山八幡宮境内図
(寺家区所蔵)

③眞珠院

守山南麓に所在する眞珠院は、室町時代中期に、實山永秀^{じつざんえいしゅう}を開山として密教系から曹洞宗に改宗した寺院である。本堂は、昭和4年(1929)に建立されたものである。境内には、正安4年(1302)の銘がある「定仙大和尚五輪塔」をはじめ、曹洞宗改宗以前の14世紀初頭から中葉の紀年銘を持つ石塔や摩崖仏が複数存在しているほか、五輪塔や宝篋印塔^{ほうきょういんとう}の残欠も数多く残されている。これらの石塔は、もともと眞珠院に伝



眞珠院

来したものだけでなく、廃絶した近在の末寺などから引き継がれたものも含まれると考えられている。紀年銘を持つものは、「中世在銘石造物群」として市の指定文化財となっている。

また、眞珠院の境内には「八重姫御堂」または「静堂」^{どうう}と呼ばれる堂宇が存在する。これは、伊東祐親^{すけちか}の娘、八重姫を供養するための堂で、八重姫の供養塔と木彫彩色の女性像が収められている。現在の建物は、昭和33年(1958)の狩野川台風後に再建されたものである。

(2) 旧下田街道と良好な市街地を形成する街道沿いの寺院

守山の東側を南北に延びる旧下田街道沿いには、中世に開創し、源氏や北条氏に所縁を持つ寺院が点在し、北条の里が中世以来の信仰の中心地であったことを窺わせる良好な市街地を形成している。



旧下田街道

①信光寺

眞珠院の北東に位置する信光寺は、元々は伊豆市にある最勝院の末寺で、開基は武田信光入道光蓮と伝えられている。本堂の左手に、武田信光の墓塔とされる宝篋印塔ほうきやういんとうがある。また境内には、中世の宝篋印塔や五輪塔の残欠が多数存在する。かつて、境内から願成就院と同文様の瓦が出土したとも伝えられており、鎌倉時代には願成就院の寺域に含まれていたものと推定されている。



信光寺

②光照寺

旧下田街道を北上し、願成就院を過ぎて200メートルほど進むと、西側に光照寺がある。旧京都知恩院末の浄土宗寺院である。応永4年(1397)に浄土宗に改宗し、それ以前は松寿院という寺号であったと伝えられる。『増訂豆州志稿』には、願成就院の子院であったとあり、また頼朝の宿館跡であるとの記述も見える。発掘調査では、鎌倉時代初期の井戸が見つかっている。光照寺には古い舞楽面が一面伝来しているが、その由緒として、修禅寺(現伊豆市)に幽閉されていた源頼家の面貌を彫った面を、使者が鎌倉へと運ぶ途中、光照寺のあたりで頼家他界の報を受け、面を同寺に収めて立ち帰ったとの伝説を伝えている。なお、同様の伝説は信光寺にも伝わっており、そこでは使者が武田信光であったとされる。また、光照寺の境内でも、中世の石塔類の残欠が複数確認されている。



光照寺

③成福寺

光照寺から、旧下田街道をさらに 200 メートルほど北へ進むと、街道西側に成福寺がある。旧東本願寺末の浄土真宗大谷派の寺院である。開山開基を、北条正宗(伝北条時宗三男)としている。境内には、北条時宗・正宗の供養塔とされる、中世の五輪塔と宝篋印塔が残る。



成福寺

(3) 北条の里と旧下田街道に係る行事

ア 願成就院の年中行事

願成就院では、春夏^{ひがんえ}の彼岸会や4月8日の花祭、8月15日の施餓鬼会^{せがきえ}、12月31日の新年法要等の他、次のような祈禱祭が執り行われている。

毎年2月3日の節分に際しては、大御堂において「星祭祈禱会」が行われる。この祈禱会は、檀家だけでなく一般にも開かれており、護摩を焚いての祈禱を受けることができる。



願成就院 不動の日祈禱祭

大御堂に不動明王が祀られていることから、不動明王の縁日である毎月28日の夕刻に、「不動の日祈禱祭」が行われている。大御堂において、護摩を焚いて行うこの祈禱祭についても、一般の参詣が可能であり、市の内外から参詣者が訪れる。これらの行事については、願成就院の歴代住職が記した記録に見え、いずれも大正時代には行われていたことがわかる。

また、願成就院を創建した北条時政の没後800年を記念し、平成27年(2015)には「開基北条時政公供養八百年遠忌」が、境内にある時政の墓前で営まれた。

イ 守山八幡宮の例大祭

守山八幡宮の例大祭は、毎年10月10日に近い日曜日に行われている。昭和16年(1941)刊行の『静岡県神社志』に、例大祭開催について記述されている。守山八幡宮の例大祭では、まず午前中に子ども神輿の巡行が行われる。この子ども神輿は、昭和50年(1975)頃、それまで行われていた大人による神輿巡行を引き継いで実施されるようになったものである。神輿の順路には、守山八幡宮周辺及び信光寺・光照寺が面す旧下田街道を通る「西ルート」、国道136号線を挟んで東側の区域を巡る「東ルート」、古川を挟んで南側の区域を巡る「南ルート」がある。

子ども神輿が守山八幡宮に戻ると、昭和9年(1934)に建てられた舞殿において「しゃぎり」の演奏が行われる。舞殿が建てられる以前は、毎年青年団によって舞台がしつら



子ども用の神輿



例大祭前夜の子どもしゃぎり演奏

えられていた。しゃぎりとは、祭に際して演奏される、太鼓・笛・摺り鉦を用いたお囃子の一種で、三島大社を中心として、伊豆半島の各地に伝承されている。韮山地域のしゃぎりは「北条囃子」と呼ばれている。守山八幡宮で奉納されるしゃぎりの曲目には、「荷崩し」「昇天^{しょうてん}」「屋台」などがある。

しゃぎりの演奏後、同じく舞殿において、氏子の中から選ばれた若者たちによって、三番叟が奉納される(三番叟については、第2章6を参照)。

ウ 旧下田街道を巡行する八坂神社の神輿

毎年7月上旬に行われる、四日町地区の鎮守である八坂神社の例大祭では、2基の神輿が巡行するが、その際、寺家地区の守山八幡宮に渡御する。八坂神社の神輿が守山八幡宮に渡御するという行事(お天王さん)は、狩野川の水難を避けようとする祈りの表れという面(第2章2を参照)と、北条の里の総鎮守である守山八幡宮への信仰を示す神事という面、両面を備えた神事であると言える。

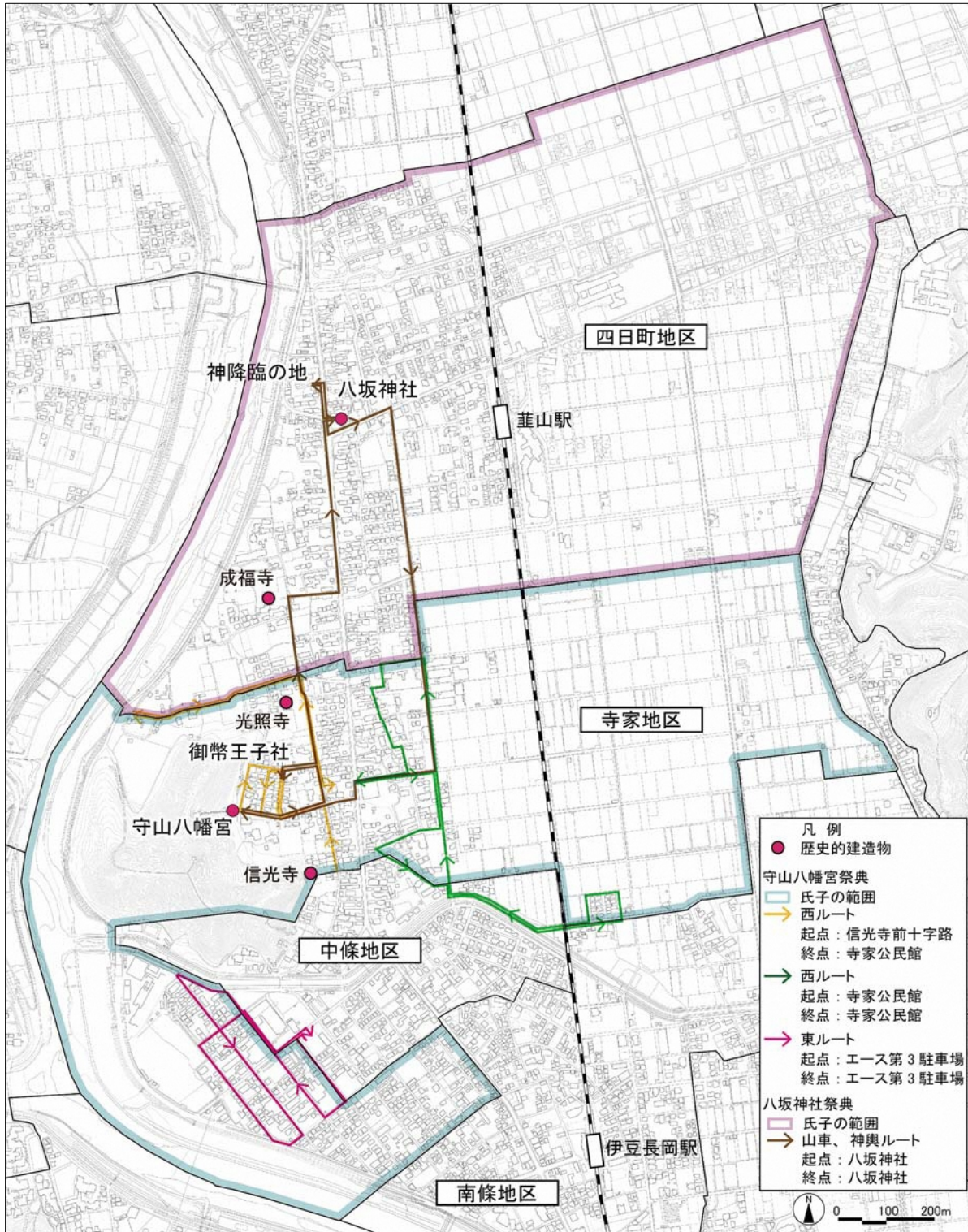


守山八幡宮に向かう神輿

神輿は、守山八幡宮の参道に入ると隊列を整え、走って八幡宮へと到達する。これは「神輿駆け」と呼ばれ、四日町地区では、元和年中(1615～1623)に榊原越中守が公認したものと伝えられている。また寺家地区の伝承では、八坂神社の祭神は、守山に祀られていた山の神を勧請したものとされおり、守山八幡宮と八坂神社の深いつながりが窺われる。

守山八幡宮に到着すると、八坂神社の神輿と氏子たちは神職による祈祷を受け、そこから旧下田街道を北上して光照寺の門前を通り、守山八幡宮の宮司家である榎家敷地内に鎮座する御幣王子社^{みてぐらのおうじ}にも渡御する。その後さらに旧下田街道を北上、成福寺の門前を経て八坂神社へと還御する。

図 2-3-2 守山八幡宮祭典・八坂神社祭典の活動範囲



エ 眞珠院と八重姫伝説

八重姫^{や え ひめ}とは、伊東庄(現伊東市)を本拠地とした平安時代末期の武将伊東祐親^{すけちか}の娘で、一名を静ともいった。八重姫は、祐親が大番役のため京に赴いていた間に、伊豆に配流となっていた源頼朝と恋仲になり、男子千鶴丸^{せんつるまる}をもうけた。京から戻ってきた祐親はそれを知って激怒し、子を川に沈めるとともに頼朝を討とうとしたため、頼朝は北条氏の館に難を逃れた。祐親は八重姫を別の人物に嫁がせたが、八重姫は失意のあまり、狩野川の淵に身を投げて命を絶てしまったと伝えられている。



八重姫供養祭

『増訂豆州誌稿』によれば、八重姫を供養する堂宇は、かつて眞珠院の北に所在した満願寺にあったが、慶応3年(1867)に眞珠院に移されたという。八重姫への供養は、満願寺から眞珠院に受け継がれ、今も毎年4月の第2日曜日に「八重姫供養祭」が行われている。眞珠院には、昭和28年(1953)頃撮影された、八重姫供養祭の写真が現存している。昭和33年(1958)の狩野川台風により眞珠院一帯も大きな被害を受けたため、供養祭も一時休止されていたが、昭和50年代初頭に再開され、今日に至っている。

供養祭では、眞珠院住職による読経が行われ、縁のある団体(伊東市文化財史蹟保存会、女塚史跡保存会等)のほか、一般の参詣者も含めて200人ほどが参加。地元婦人会による模擬店や餅撒きなども実施されている。

八重姫御堂については、女性参詣者が自ら造った小さなはしごを供える風習がある。これは、悲恋の後にその命を絶った八重姫を不幸な女性の守り神として捉え、願い事をするという信仰から行われているものである。

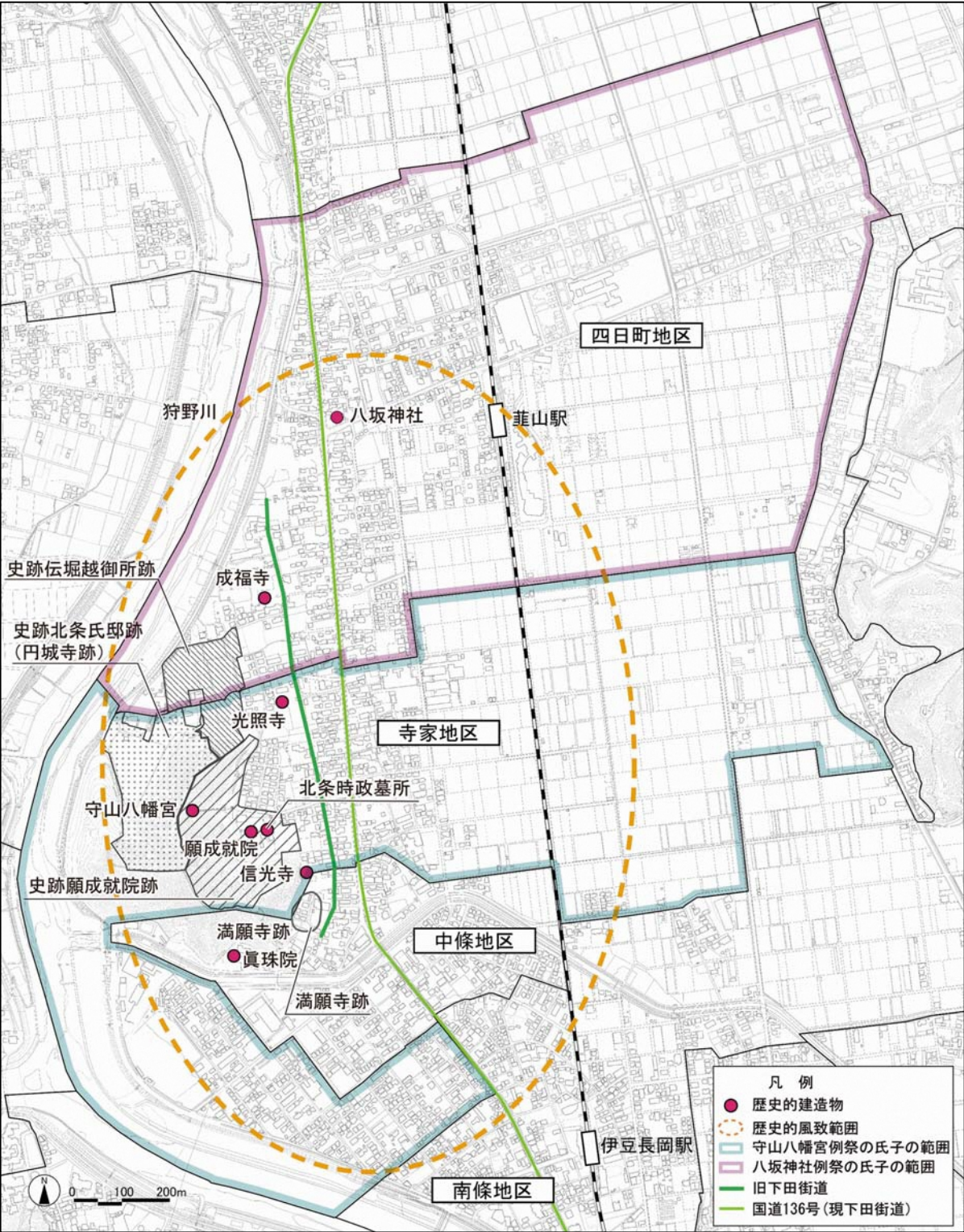
図2-3-3 八重姫供養祭の活動範囲



(4) まとめ

これまで見てきたように、北条の里と旧下田街道には、北条氏にまつわる中世以来の歴史が重層的に集積している。それだけでなく、守山と守山八幡宮をはじめ、願成就院、眞珠院、信光寺、光照寺、成福寺といった、信仰の拠点が集中しており、古い社殿や本堂などの歴史的建造物、仏像や中世の石造物、今日まで続く祭礼や風習とともに、豊かな歴史の息吹を今に伝える、維持向上していくべき良好な歴史的風致を形づくっている。

图 2-3-4 歴史的風致範囲図



【コラム 北条の里と守山中世史跡群】

守山を中心に展開する三つの史跡は、「守山中世史跡群」と総称されている。それぞれ鎌倉時代から室町時代にかけての日本史上の画期に関わる重要な遺跡であるだけでなく、鎌倉幕府の執権北条氏に深い関連を持っており、北条の里の歴史的背景をなすものである。

史跡北条氏邸跡(円成寺跡)

伊豆国蛭ヶ小島(四日町地区に比定地がある)に配流された源頼朝は、北条政子と出会い、北条時政の後ろ盾を得たことで平家打倒の兵を挙げ、最初の武家政権である鎌倉幕府を開くに至った。つまり、守山西麓の谷あいには位置する史跡北条氏邸跡(円成寺跡)は、まさに日本の中世が始まった場所である。また、鎌倉幕府滅亡後には、北条高時の母覚海円成が円成寺を開き、北条氏の菩提を弔った場所でもある。円成寺は、室町時代には伊豆国守護である山内上杉家の庇護を受けた。その間、上杉氏の女性が歴代の住持となるなど、繁栄したことが知られている。

史跡北条氏邸跡(円成寺跡)については、これまでの発掘調査で鎌倉時代の多数の建物跡群や、円成寺を構成する建物とみられる礎石建物跡や庭園遺構などが発見されており、次第に往時の様相が明らかになりつつある。



史跡北条氏邸跡(円成寺跡)

史跡願成就院跡^{がんにょうじゅいん}

守山の東麓に位置する願成就院は、北条時政が源頼朝の奥州征伐戦勝を祈願して文治5年(1189)に建立したと『吾妻鏡』にある。この寺は北条氏の氏寺でもあり、鎌倉時代には北条氏によって度々堂塔の建立が行われるなど、隆盛を誇った。境内は現在よりもずっと広く、大きな池や庭園がある、同時期の寺院に共通した「臨池伽藍」様式の寺であったと考えられている。

これまでの発掘調査により、北条時政が承元元年(1207)に建立した「南塔」と見られる塔の基壇等の遺構が発見されている。発掘調査によって遺構が確認されたところと、現在も残る願成就院の境内や背後の山(守山東側斜面)が、史跡願成就院跡に指定されている。



史跡願成就院跡

史跡伝堀越御所跡^{でんほりごえ}

史跡伝堀越御所跡は、守山の北側に、史跡北条氏邸跡(円成寺跡)と接するように所在している。堀越御所とは、室町幕府の関東支配を任された堀越公方の館があった場所である。本来、室町幕府の関東支配は、鎌倉府を中心に行われていたが、15世紀前半以降、鎌倉公方と幕府の対立が激しくなり、関東は戦乱状態となった。そのため、時の将軍足利義政は、仏門に入っていた異母兄政知を還俗させ、幕府による関東支配を回復すべく派遣した。政知は、当初鎌倉へ入ることを目指していたが、関東の戦乱が激しかったことから鎌倉入りは適わず、守山北側の「堀越」の地に拠点を置くこととなった。この場所が選ばれたのは、鎌倉時代執権北条氏の本拠地を踏襲する狙いがあったからとも考えられる。

堀越に居館を築いたことから政知は「堀越公方」、その居館は「堀越御所」と呼ばれるようになった。居館の規模や配置は明らかになっていないが、これまでに実施された部分的な発掘調査によって、遣り水や滝口を配した池の存在が確認されている。また、茶の湯に関連した出土遺物が見られるなど、堀越御所は、京風の雅やかな庭園を持つ館であったと考えられている。

政知は、鎌倉へ入ることができないまま延徳3年(1491)に病死し、跡目争いの後に息子茶々丸が堀越公方の座を継いだ。明応2年(1493)、北条早雲^{ほうじょうそう'un いせしんくろうもりとき そうずい}(伊勢新九郎盛時・宗瑞)に攻め込まれ、滅亡することとなった。早雲はその後伊豆国を平定、関東に進出して戦国大名北条氏の基礎を築いた。この地は、関東における戦国時代の幕開けを告げる場所となったのである。



史跡伝堀越御所跡

図2-3-5 遺跡範囲図

